

日本語母語話者と台湾人日本語学習者の接触
場面における調整行動
—遠隔接触場面と対面接触場面の比較を試み
る—

施信余/Shih, Hsin-Yu

淡江大學日本語文學系 助理教授

Department of Japanese, Tamkang University

【摘要】

本論文從「語言形式上的調整行為・發言內容上的調整行為」、
「要求對方調整・實際執行調整」這兩個觀點來進行檢證，以實
際對話內容為分析對象，採用會話分析的手法來探討分別在「遠
距對話場景」及「面對面對話場景」中調整行為使用上的特徵。
分析結果發現，身處在遠距對話場景中亦或是面對面對話場景中，
日語母語話者在調整行為的使用上沒有明顯差異；然而，日語學
習者處於面對面對話場景時，不但面臨的語言形式上的問題較處
於遠距對話場景時少，也較容易採取引導更深層對話內容的調整
行為。

【關鍵詞】

遠距對話場景、面對面對話場景、語言形式上的調整行為、
發言內容上的調整行為、會話分析

【Abstract】

In order to understand the differences between remote conversation scene and face-to-face scene, there are two points of view in this study, one is “adjustment in form v.s. adjustment in content” and the other is “requires adjustment v.s. implement adjustment”. The conclusion reveals that, there are almost no significant difference in the use of adjustment between remote scene and face-to-face scene which was used by Japanese native speaker.

However, while Japanese learners in face-to-face scenes, less formal language problems occurred and relatively easy to take adjustment behavior for deeper understanding toward the content.

【Keywords】

remote conversation, face-to-face conversation, adjustment inform, adjustment in content, conversation analysis

1. はじめに

従来、接触場面研究は母語話者と非母語話者が同じ空間を共有している、いわゆる「対面」の場合に集中していたが、近年、日本語による接触場面は更なる多様化を果たしている。マルチメディアやネットワークなどの技術的發展に伴い、電子メール、チャット、テレビ電話といったツールで、インターアクションが行われるようになった。すなわち、日本語学習者の参加する接触場面は、「対面接触場面」に加え、新しい「遠隔接触場面」にまで幅を広げているのである（尹 2002）。しかし、研究分野では、遠隔接触場面に関するものは未だ数少なく、内容面においても、そのほとんどが電話の談話研究（町田 1995、1997 等）に限られている。宮崎（2002）によると、意味交渉が起きる場面のバリエーションについて指摘し、「意味交渉は、接触面で実際に対面する参加者間でのみ行われるわけではなく、ある場面空間を参加者が共有していない場合でも起こりうる」と述べている。「聴覚の空間」だけが提供される電話の場合と異なり、遠隔でありながらも「聴覚」と「視覚」の空間を提供できる新しいコミュニケーション・ツールが「テレビ会議システム」というものである。しかし、通常のコミュニケーションの持つ「お互いの顔が見える」、「双方向性」、「同時性」などの特徴を備えているとはいえ、日本語学習者がテレビ会議システムを介した遠隔接触場面に参加し、目標言語を使って母語話者とコミュニケーションを行うのは決して容易なことではない。

接触場面の新たな形態としてテレビ会議システムを考えるためには、テレビ会議システムを介した遠隔接触場面にはどのようなインターアクションが行われているのかを具体的に検証しなければならない。そこで本研究では、テレビ会議システムを介した遠隔接触場面の特徴を明らかにするために、コミュニケーション・ストラテジーの使用実態を中心に、対面接触場面と比較を行う。また、今までの接触場面の研究は誤用分析を行う場合が多かったが、ネウストプニー（1981）によると、「誤用分析」は、各場面の表層に現れた一部の言語問題だけに焦点を当てているなどの短所が指摘されていることから、本研究では話者間のインターアクションや相互作用が明確に把握できるように、自然会話を対象にして会話分析の手法を用いることにする。

遠隔接触場面及び対面接触場面において、それぞれどのようなコミュニケーション問題が存在しているのか、日本語母語話者（NS）と日本語学習者（NNS）は円滑なコミュニケーションを図るために、それぞれどのような調整のストラテジーを用いているのか、その相互作用のプロセスを考察することを、本研究の目的とする。

2. 調整行動の定義

ネウストプニー（1997）は、「調整行動」を、インターアクションの中で起きた問題を解決するために行われるもので、その問題はインターアクションを支配する規範から逸脱したときに起こるものであるとしている。それに対して、本研究では「調整行動」を、規範に逸れたときの問題解決の手段と見なすより、すなわち、適切ではない用語や表現を適切なものに調整するという意味合いでこの用語を用いるのではなく、自分の考えがうまく伝わるように、他者と協働作業をしながら達成させる手段であると考えている。

したがって本研究では、「調整行動」を、意味の伝達がうまくいかないおそれのあるとき、会話参加者が協力して意味の伝達

を補償する行動であると定義する。

3. 研究方法

3.1 研究課題

- 1) 日本語母語話者と台湾人日本語学習者による、遠隔と対面の二種類の接触場面における、調整行動の使用実態を明らかにする。
- 2) 遠隔と対面の二種類の接触場面において、調整行動がコミュニケーションの中でどのように機能しているかを、インターアクションの観点から考察することによって、それぞれの接触場面の特徴を明らかにする。

3.2 対象とする会話データ

本研究では、二種類の会話データを分析対象とする。

まず、遠隔接触場面での会話は、異文化交流を目的とした多地点で学生主導のテレビ会議であり、アジア四大学¹をインターネットで結び、日常的なテーマについて学生に意見交換の場を提供している。本研究は、2011年10月から2011年12月の間、合計四回の日本語会議²を分析対象とした。一回につき、およそ一時間である。会議の様様をすべて録音、録画し、また、会議終了後、フォローアップ・アンケートに答えてもらった。記録された会話データの文字化は、宇佐美（2007）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2007年3月31日改訂版」に従って行った。四回のテレビ会議の総会話時間は合計221分12秒である。遠隔接触場面会話デー

¹参加校は台湾の淡江大学、日本の早稲田大学、慶応大学、中国の北京大学の四大学である。本会議への参加は、正規授業の一環として実施する学校もあるが、淡江大学では課外活動として参加者を募って実施している。また、リアルタイムの遠隔交流には高度な外国語能力が必要とされるため、本校は特に日本語学科高学年の大学生の参加を優先させた。

²本研究の対象とされている四回の会議討論テーマは、「音楽鑑賞を通して異文化交流をしよう」、「留学前と留学後」、「映画鑑賞」、「子どものときの夢」であり、それぞれのテーマにはさらに三つないし四つのサブテーマが設けられている。

タの詳細を【表 1】と【表 2】に提示する。

一方、分析に用いた対面接触場面での会話は、人間の相互作用としての「言語運用」の分析に適した形で文字化され、公開されている宇佐美まゆみ監修（2011）『BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011 年版』の中の 12 会話（初対面二者間による雑談、計 234 分 20 秒）である。対面接触場面会話データの詳細を【表 3】にまとめる。

【表 1】本研究の研究対象とする遠隔接触場面会話データの詳細 I

番号	日時	テーマ	サブテーマ	参加校	司会校
1	2011 年 10 月 13 日	音楽鑑賞を通して異文化交流をしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・曲の紹介 ・音楽をめぐる話題 <ul style="list-style-type: none"> ①あなたにとって音楽とは？ ②あなたは誰かのファン？スターを追っかける経験談 ・音楽鑑賞のほかに何か趣味はないか。 	早稲田 慶応 淡江 北京	淡江
2	2011 年 10 月 27 日	留学前と留学後	<ul style="list-style-type: none"> ・留学中、一番印象に残っているエピソード。 ・どうして留学しようと思ったのか。 ・留学に求めるものは？ ・留学しない理由は何か。 	早稲田 慶応 淡江 北京	早稲田
3	2011 年 11 月 17 日	映画鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> ・映画を見るときのスタイルは？ 例：①海外の映画を見るときの、字幕で？吹き替えで？②映画館で見るか、自宅で見るときの。 ・作品に関する話題 例：好きな/おすすめの映画・俳優・監督など。 ・海賊版について、どう思うか。 ・自分の国の俳優と日本の俳優の活躍について。 	早稲田 慶応 淡江 北京	慶応
4	2011 年 12 月 08 日	子どものときの夢	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の子どものときの夢を話し合おう。今の夢は何か。それは子どものときの夢と違うのか。 	早稲田 慶応 淡江 北京	北京

			<ul style="list-style-type: none"> ・理想と現実の間には大きな差がある。もし困難にぶつかったら、自分の最初の夢に執着するか。 ・各地の小学校や中学校の教育は子どもの夢の実現を手助けしてくれていると思うか。 ・大学生として、今の教育制度についてどう思うか。 		
--	--	--	---	--	--

【表 2】本研究の研究対象とする遠隔接触場面会話データの詳細Ⅱ³

番号	会話時間	早稲田		慶応		淡江		北京	
		NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS
1	62分	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS
	14秒	4人	0人	3人	2人	0人	7人	0人	2人
2	47分	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS
	25秒	6人	0人	9人	2人	0人	3人	0人	1人
3	53分	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS
	15秒	4人	1人	6人	2人	0人	4人	0人	2人
4	58分	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS	NS	NNS
	18秒	7人	0人	5人	2人	0人	4人	0人	3人

【表 3】本研究の研究対象とする対面接触場面会話データの詳細

会話グループ名	台湾人日本語学習者（上級）と日本語母語話者の初対面雑談
分析言語	日本語
被験者	20代前半大学生・大学院生男女
話者の関係	初対面同性同士
収集方法	ベースを設定して、それぞれに初対面の20代前半(同等)・30代前半(年上)の対話者に会話してもらう。
会話のジャンル	接触場面（日本語母語話者と台湾人日本語学習者）の雑談
1会話における話者の数	2人
総会話数	12会話
1会話の平均時間	約19分32秒
総会話時間	234分20秒

³表に記載されている数字は各参加校の発話者数である。NS（日本語母語話者）とNNS（非日本語母語話者）に分けて提示してある。

3.3 分析項目

本研究では、各自考えていることを表現するために、会話参加者同士が行うインターアクションに注目し、それを「意味交渉」として捉える。「意味交渉を行う際に会話参加者が実際に用いるストラテジー」、すなわち「調整行動」の観点から分析を行う。

調整行動の分析にあたり、「形式調整行動」と「内容調整行動」という枠組みを用いる。前者は語彙、表現、文法、発音といった言語形式に関わる問題を解決するものであり、後者は会話参加者がテーマについて考えている内容を表現したり、引き出したりすることに働きかけるものを指している。

また、ファン（1999）、池田（1999）を参考に、さらに調整行動の分類を、調整の引き金となるマークがどのような形式であったかという「調整要請型」と、どのような調整が遂行されたかという「調整実行型」の二つに分ける。要するに、調整行動を大きく、「要請型形式調整行動」、「実行型形式調整行動」、「要請型内容調整行動」、「実行型内容調整行動」の四つに分けることにして、それぞれさらに下位分類をした。全部で十一の項目がある。

【表 4】本研究における調整行動の分析項目

形式調整行動		内容調整行動	
調整 要請型	調整 実行型	調整 要請型	調整 実行型
① 聞き返し	⑤ 理解促進	⑧ 内容確認要求	⑩ 内容確認応答
② 支援要請	⑥ 支援実行	⑨ 明確化要求	⑪ 明確化
③ 確認要求	⑦ 他者修正		
④ 理解チェック			

以下では、各項目の定義と具体例を述べる。

①聞き返し

一相手の発話に対して、語彙の意味が理解できなかつたり、よく聞き取れなかつたりした際に、自分の不理解を表明するものである。

例 1. 「聞き返し」の例（該当発話：発話文番号 101）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者 ⁴	発 話 内 容
111	98	*	NNSBM03	え?、なぜ?。
112	99	*	NSSM03	何だろうなあ、僕は、もちろん中国にも行ってみたいっていうのもあるし、(はい)それと、まあ、中国語を勉強しているというのもあるから。
113	100	*	NSSM03	“あもい”のほうに。
114	101	*	NNSBM03	あもい?。
115	102	*	NSSM03	“あもい”っていうのは、えと、福建省のほうで、廈門、(ああああああ)あの辺に行って、台湾を見てみたいっていうのも1つ、それが1つの夢で、もう1つの夢は、あの、台湾から、(はい)そういう中国大陸を眺めてみたいっていう(ああ)変な夢があって、(<笑い>)うん、で、それをやるには、金門島に行くしかないんだよね、(はい)もし中国を見たいのであれば。

⇒なぜ台湾の離島である金門島に行ったかという質問に対して、NSSM03 は発話文番号 99～104 にわたって答えている。その答えの中に出てきた「あもい」という言葉が理解できず、NNSBM03 は聞き返している場面である。

②支援要請

一自分の発話中、語彙や表現などの言語形式面の問題で伝達に困難が生じた場合、相手に支援を求めるものである。

⁴ 話者の記号について、「NS」は日本語母語話者で、「NNS」は日本語学習者を指す。その次の「B」はベースとなる話者で「S」は年齢が同等である話者で、「O」は年上の話者を意味する。「F」(女性)か「M」(男性)かで話者の性別を表し、最後の二桁の番号は各話者を区別するための通し番号である。

例 2. 「支援要請」の例（該当発話：発話文番号 279）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
298	278	*	NSOF01	そっかじゃあ日本の印象はどうですか？。
299	279	*	NNSBF04	日本の印象は(うん)、えー、きれいだし(うんーうんうん)、うーん、人々が、えー、熱中?[↑]、熱中じゃなくて…>{<}。
300	280	*	NSOF01	<あー>{>}、親切？。
301	281	*	NNSBF04	親切[手をたたく]、<そうそうそう>{<}。

⇒発話文番号 279 の発話では、日本に対する印象について語っているところ、適切な言葉が思い浮かばず、上昇調で相手の助けを求めている例である。

③確認要求

一相手の発話に対して、理解したとおりに表現することによって、自分が正しく理解しているかを確認するものである。

例 3. 「確認要求」の例（該当発話：発話文番号 172）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
184	170	*	NNSBM03	下町?[↑]。
185	171	*	NSSM03	うん、だから、浅草とかさ、<ああいうところ>{<}。
186	172	*	NNSBM03	<ああ、伝統市場?>{>}。
187	173	*	NSSM03	伝統(ああ)市場とか。
188	174-1	/	NSSM03	あの辺も、けっこう、お店、こう、経営している人たちは、何代も、3代とか、5代とか、
189	175	*	NNSBM03	あー、すごいですよ。
190	174-2	*	NSSM03	ずっーと長い、そういう歴史があるんだよね。

⇒「下町」の意味がわからなかった NNSBM03 は、NSSM03 が挙げた例を聞いて（発話文番号 171）、「伝統市場のことではないか」と自分の理解を NSSM03 に確認している例である。

④理解チェック

一自分の発話が相手に正しく理解されているかどうか確認するものである。

例4. 「理解チェック」の例（該当発話：発話文番号171、175）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
180	168	*	NNSBF01	で、(<2人笑い3秒>)、えと、「NSSF01の姓」さんは1人暮らししたことが<ありますか?>{<}>。
181	169	*	NSSF01	<えと、えとね、>{>}1ヶ月だけある。
182	170	*	NNSBF01	1ヶ月、(<笑い>)1ヶ月だけ?<2人笑い>。
183	171	*	NSSF01	大学で、 大学祭 って分かる?[↑]。
184	172	*	NNSBF01	大学…【。
185	173	*	NSSF01	】学園祭。
186	174	*	NNSBF01	あ、知っています。
187	175	*	NSSF01	学園祭の時に、「大学名1」は1ヶ月半ぐらい、皆で、 おみこし って分かる?[↑]。
188	176	*	NNSBF01	あ、分かります。
189	177	*	NSSF01	おみこしと、中国語の劇、(はい)をするために、おみこしは夜の、いつも2時とか3時までずっ—と作っているの、授業終わってから、5時ぐらいから。

⇒ここは「大学祭」や「おみこし」という語彙レベルの意味理解確認である。

⑤理解促進

—自分の発話を調整することで、相手の理解を図るものである。
相手の不理解を表明する「聞き返し」が先行する場合もある。

例5. 「理解促進」の例（該当発話：発話文番号112）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
114	108	*	NSSM01	まあ、ここの、陽明山の、(はい)気候にまだ慣れてないです<笑い>。
115	109	*	NNSBM02	あー。
116	110-1	/	NSSM01	気候、,
117	111	*	NNSBM02	気<候>{<}>。
118	110-2	*	NSSM01	<分>{>}かります?[↑]。
119	112	*	NSSM01	暑くなったり、寒くなったり、(<笑い>)風が吹いたり、(はい)霧が出たりするでしょう?<笑い>。

⇒陽明山の気候について具体的に説明することで相手の理解を促している。

⑥ 支援実行

—相手の支援要請から、相手の伝達上の困難を察知し、相手が伝えたいことを表出できるように援助を行うものである。

例 6. 「支援実行」の例（該当発話：発話文番号 303）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発 話 内 容
310	301-1	/	NSOF01	そう、あとはなんかあの、台湾の卵焼き(はい)、あの、なんだっけ?[↑]、うーんと、ツアイとかいう,,
311	302	*	NNSBF01	ツアイ。
312	301-2	/	NSOF01	うん、中に(うん)なんか漬物みたいの<入ってる>{<} ,,
313	303	*	NNSBF01	<大根の>{>}。
314	301-3	*	NSOF01	そうそうそう大根の、が好き。
315	304	*	NNSBF01	私も好き<笑い>。

⇒NSOF01 は台湾のある料理に入っている漬物の名前を正しく思い出せず、「なんだっけ?[↑]」と、疑問型上昇調で相手に助けを求めている。それに対する返答（発話文番号 303）が「支援実行」に当たる。

⑦ 他者修正

—相手の発話の不適切さに気づき、相手に確認せずに修正を行うもの。その会話相手は修正があってはじめて自分の発話の不適切さに気づくものが多い。

例 7. 「他者修正」の例（該当発話：発話文番号 391）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発 話 内 容
408	384	*	NSOF01	あ、でもね、そう、なんか、春に、あの、『GoodLuck』って…<知ってる??>{<}。
409	385	*	NNSBF03	<『GoodLuck』>{>}?。
410	386	*	NSOF01	うん。
411	387-1	/	NSOF01	ドラマで(あー)、木村拓哉が(ふん、ふん)出てる(あー)、飛行機の,,
412	388	*	NNSBF03	あっ。
413	387-2	*	NSOF01	パイロットを…。
414	389	*	NNSBF03	あ、き、聞いた(うん)。

415	390	*	NNSBF03	見て無いけど、<聞いた>{<}【【。
416	391	*	NSOF01	】】<聞いた>{>}ことあるんだ。
417	392	*	NNSBF03	うんうんうん。
418	393	*	NSOF01	うん、あれがね、面白かったですよ<笑い>。

⇒『GoodLuck』というドラマを知っているかという質問に対して NNSBF03 は「見てないけど聞いた」と答えた。NSOF01 は相手の「聞いた」を「聞いたことあるんだ」と言い直すことで修正を行っている。

⑧ 内容確認要求

一相手の発話内容に対して、語彙レベルの意味を確認するのではなく、相手が伝えたいことについて自分の理解が正しいかどうか、相手に確認を求めるものである。

例 8. 「内容確認要求」の例（該当発話：発話文番号 354、356）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発 話 内 容
373	348	*	NSSF01	え、そのおじさんも、こう、お皿を作ってるの?。
374	349	*	NNSBF03	お、おじ、おじ、は、窯、窯を作ってる。
375	350	*	NSSF01	窯を作ってる?[驚いたように]=。
376	351	*	NNSBF03	=うん、うん。
377	352	*	NSSF01	え、窯を作るの?=-。
378	353	*	NNSBF03	=うんうんうんうん、そうよ。
379	354	*	NSSF01	え、誰かの家に行って、窯を作るの?。
380	355	*	NNSBF03	あ、もし、工場が必要になつたら<{<}【【。
381	356	*	NSSF01	】】<新しい工場>{>}を作る時に(うん、うん)、窯を作るの?。
382	357	*	NNSBF03	はい、はい。
383	358	*	NSSF01	<笑い>凄いな。

⇒NNSBF03 は台北近郊にある陶磁器で有名なところ、鶯歌という町に住んでおり、実家に陶器工房があって親は食器などを作っていると語っていた後に、一緒に住んでいる叔父が話題に出た。発話文番号 350、352、354 は発話文番号 349 に対する内容確認要求であり、発話文番号 356 は一つ前の相手の発話への内容確認要求である。

⑨ 明確化要求

—相手の発話から発生した質問や疑問を指している。具体的には、相手の発話に関して、「意図がわからない」、「興味を感じ、もっと知りたい」、「自分が理解、予想したことと異なった」場合、相手にその説明を要求するものである。

例 9. 「明確化要求」の例（該当発話：発話文番号 43）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発 話 内 容
42	41	*	NSOF01	=じゃあ、日本語を勉強して、(うん)英語の勉強と違うなあって思うことはありますか？。
43	42	*	NNSBF03	はい、(うん)だから日本語は下手になりました<2人笑い>。
44	43	*	NSOF01	<笑いながら>どうして？。
45	44	*	NNSBF03	あの、いやあの英語、あの、日本語を勉強する時、(うん)英語は、だんだん、あの、勉強する時間もなくなり<ましたから><く>。
46	45	*	NSOF01	<うんうんうん、><{}>そうですね、分かります。
47	46-1	/	NSOF01	あと、日本語の中には、(うん)カタカナがたくさんあって、
48	47	*	NNSBF03	はいはいはい。
49	46-2	*	NSOF01	なんか英語と違う発音だから、<笑いながら>(うんうんうん)日本人も英語があまり上手じゃないですよ<笑いながら>。

⇒相手の発言に興味を感じ、もっと知りたいと思った NSOF01 は「どうして？」とさらに相手に説明を求めている。

⑩ 内容確認応答

—相手の「内容確認要求」に対して応答するものである。「うん」と答える場合もあれば、説明したり補足したりする場合もある。

例 10. 「内容確認応答」の例（該当発話：発話文番号 119）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発 話 内 容
125	117	*	NNSBM02	あ、「大学名 2」はどうですか？。
126	118	*	NSSM01	あ、イメージですか？。
127	119	*	NNSBM02	イメージ、風景とか、…なんでも。
128	120	*	NSSM01	とりあえず、大きいですね。

⇒発話文番号 118 では相手の質問の意味について確認している。その確認の質問に対する返答（発話文番号 119）は「自分の発話への理解確認応答」に当たる。

⑪ 明確化

一相手による「明確化要求」が先行し、具体的な例や言い換えなどによって自分の伝えたいことが明確に相手に伝わるように試みるものである。

例 11. 「明確化」の例（該当発話：発話文番号 411、412）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
431	408	*	NSSM01	補講はやるときも、やる先生もいますけどー、やらない先生もいます。
432	409	*	NNSBM02	あ、そう。
433	410	*	NNSBM02	やらない先生は、補講しない、でも学校の方は平気ですか？。
434	411	*	NSSM01	それも先生次第ですねー、はい。
435	412	*	NSSM01	だから、ちゃんとまじめに授業する先生もいますけどー（はい）、手を抜く先生もー、もちろん。

⇒発話文番号 410 は「明確化要求」に当たる発話で、今進行している話題についてさらに質問することで関心を示している。その相手の質問に対する返答部分（発話文番号 411、412）が「明確化」に該当する。

4. 結果と考察

ここでは、前節で述べた「形式調整行動」と「内容調整行動」はそれぞれの会話の中でどのように行われているか、また、インターアクションの観点から、「形式調整行動」と「内容調整行動」は互いにどのように関わっているか、遠隔接触場面と対面接触場面の間に相違点がみられるかについて考察する。

4.1 各接触場面における調整行動の使用実態

それぞれ遠隔接触場面と対面接触場面において、本研究で取

り上げられている十一の調整行動の使用頻度を【表 5】にまとめてみた。

【表 5】各調整行動の使用頻度（単位：回）

タイプ	性質	項目名	遠隔接触場面		対面接触場面	
			NS	NNS	NS	NNS
形式調整行動	調整 要請型	1. 聞き返し	2	23	1	7
		2. 支援要請	0	41	1	8
		3. 確認要求	28	6	4	1
		4. 理解チェック	8	5	13	2
	調整 実行型	1. 理解促進	38	29	9	2
		2. 支援実行	41	0	9	1
		3. 他者修正	3	0	2	0
	合計	120	104	39	21	
内容調整行動	調整 要請型	1. 内容確認要求	24	15	5	2
		2. 明確化要求	64	22	26	14
	調整 実行型	1. 内容確認応答	15	23	2	5
		2. 明確化	46	52	16	26
		合計	149	112	49	47

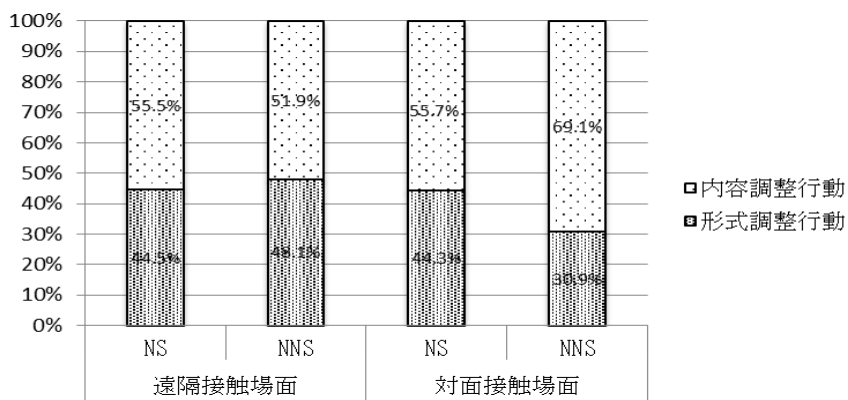
【表 5】からわかるように、遠隔接触場面において、NS による使用頻度が高かったのは「明確化要求」、「明確化」及び「支援実行」であり、NNS による使用頻度が高かったのは「明確化」、「支援要請」及び「理解促進」である。一方、対面接触場面において、NS による使用頻度が高かったのは「明確化要求」、「明確化」及び「理解チェック」であり、NNS による使用頻度が高かったのは「明確化」、「明確化要求」及び「支援要請」である。

以上の結果から、「明確化要求」と「明確化」が一番よく現れていることがわかった。この二つは共起関係が強い調整行動ではあるが、これらが多用されているのは、「明確化要求」の定義の指し示す範囲が広いことと、雑談の会話では相手の発言に興味を示すことでコミュニケーションが持続し良い人間関係が保

てることに起因すると思われる。

4.2 タイプ別からみた調整行動の使用実態

それぞれ遠隔接触場面と対面接触場面において、形式調整行動と内容調整行動がどのように使われているかを以下の【図1】にまとめてみた。



【図1】タイプ別からみた調整行動の使用実態

【図1】からわかるように、NSによる調整行動の使用について、「内容調整行動」と「形式調整行動」の使用割合は、二種類の接触場面ではだいたい同じような傾向を示している。一方、NNSによる調整行動の使用に関しては、特に対面接触場面において、「内容調整行動」の使用割合は遠隔接触場面における値を上回り、全体使用の七割近く占めている。

つまり、NSにとって自分が置かれた場面は遠隔か対面かによる違いはほとんどないと言えるが、NNSにとって遠隔接触場面より対面接触場に置かれた場合のほうが言語形式の問題が比較的少なく、内容を引き出すことに働きかける行動をとりやすくなる傾向があるようである。

ここではさらに、「要請型」か「実行型」という性質からみた使用傾向について検証する。

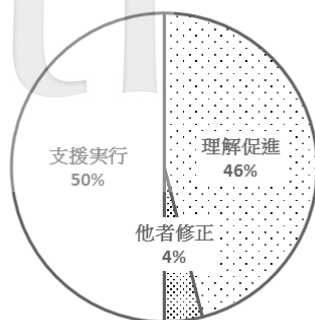
【表 6】 調整行動の性質からみた使用頻度と割合

接触場面別		遠隔接触場面		対面接触場面	
タイプ	性質	NS	NNS	NS	NNS
形式調整行動	調整要請型	38 (14.1%)	75 (34.7%)	19 (21.6%)	18 (26.5%)
	調整実行型	82 (30.4%)	29 (13.4%)	20 (22.7%)	3 (4.4%)
内容調整行動	調整要請型	88 (32.8%)	37 (17.1%)	31 (35.2%)	16 (23.5%)
	調整実行型	61 (22.7%)	75 (34.8%)	18 (20.5%)	31 (45.6%)
合計		269 (100.0%)	216 (100.0%)	88 (100.0%)	68 (100.0%)

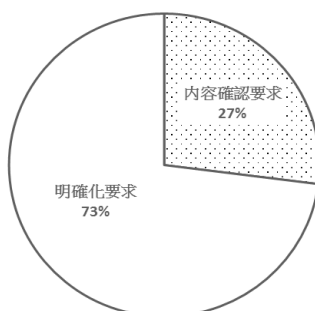
* 括弧内に示されている割合は、「形式調整行動」と「内容調整行動」を合わせた全体の使用頻度に占める割合である。

上記の【表 6】からわかるように、遠隔接触場面において、NS は NNS より「実行型形式調整行動」と「要請型内容調整行動」を多用する傾向がみられるが、一方、NNS は NS より「要請型形式調整行動」と「実行型内容調整行動」を多く使用する傾向を見せている。また、対面接触場面において、NS による「実行型形式調整行動」の使用が多く観察され、NNS による使用の中で NS より多く使用され、しかも NS による使用との有意差が認められたのは「実行型内容調整行動」である。

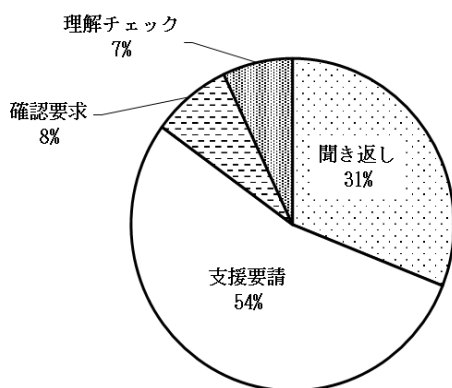
以下では、それぞれ多用傾向が観察されたタイプ別・性質別からみた調整行動には果たして、十一項目の調整行動のうち、どれが頻繁に使われるか、その内訳を詳しくみることにする。



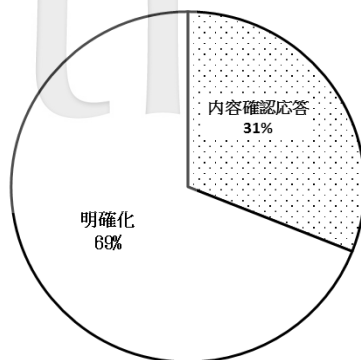
【図2】遠隔接触場面におけるNSによる「実行型形式調整行動」の使用内訳



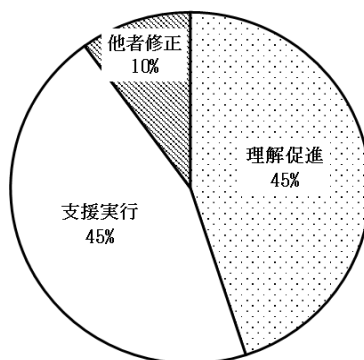
【図3】遠隔接触場面におけるNSによる「要請型内容調整行動」の使用内訳



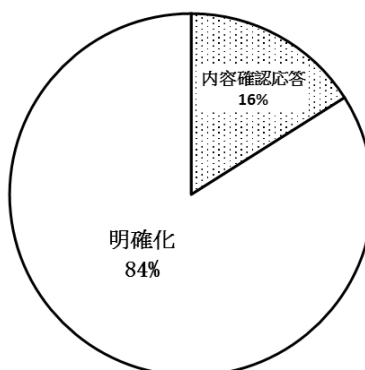
【図4】遠隔接触場面におけるNNSによる「要請型形式調整行動」の使用内訳



【図 5】 遠隔接触場面における NNS による
「実行型内容調整行動」の使用内訳



【図 6】 対面接触場面における NS による
「実行型形式調整行動」の使用内訳



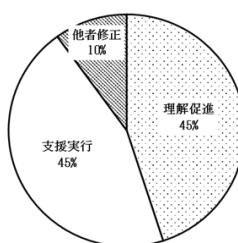
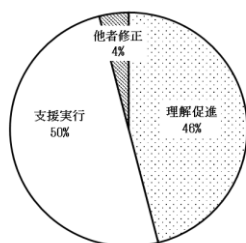
【図 7】 対面接触場面における NNS による
「実行型内容調整行動」の使用内訳

上記の【図2】から【図7】の六つの図からわかるように、遠隔接触場面において、NSによる使用が多く観察されたのは「支援実行」、「理解促進」と「明確化要求」であり、NNSによる使用が多かったのは「支援要請」、「聞き返し」と「明確化」である。また、対面接触場面において、「実行型形式調整行動」の中でNSによる使用が特に多かったのは「支援実行」と「理解促進」であり、NNSによる「実行型内容調整行動」の使用について占める割合が最も多かったのは「明確化」である。

その内、異なる接触場面での使用状況が比較できるのは「実行型形式調整行動」（【図2】と【図6】）及び「実行型内容調整行動」（【図5】と【図7】）であるが、その内訳からもわかるように、今回の会話資料に限って言えば、接触場面別による使用上の特徴は特にないと見えよう（【図8】と【図9】をご参照）。

遠隔接触場面

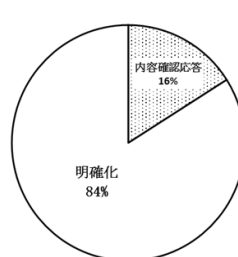
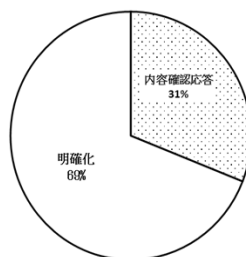
対面接触場面



【図8】NSによる「実行型形式調整行動」

遠隔接触場面

対面接触場面



【図9】NNSによる「実行型内容調整行動」

5. おわりに

本研究では、「形式調整行動」か「内容調整行動」か、「調整要請型」か「調整実行型」という二つの観点から遠隔接触場面と対面接触場面においてそれぞれどのような使用上の特徴がみられるかについて検証してきた。調査結果から、以下のことが明らかになった。

- 1) 遠隔接触場面においても、対面接触場面においても、「明確化要求」と「明確化」が一番よく現れている。この二つはそもそも共起関係が強い調整行動であるが、それらが多用されるのは、「明確化要求」の定義の指し示す範囲が広いことと、雑談の会話では相手の発言に興味を示すことでコミュニケーションが持続し良い関係が保てることに起因すると思われる。
- 2) NSにとって自分が置かれた場面は遠隔か対面かによる違いはほとんどないと言えるが、NNSにとって遠隔接触場面より対面接触場に置かれた場合のほうが言語形式の問題が比較的少なく、内容を引き出すことに働きかける行動をとりやすくなる傾向がある。
- 3) 遠隔接触場面において、NSは「実行型形式調整行動」と「要請型内容調整行動」を多用する傾向がみられるが、NNSは「要請型形式調整行動」と「実行型内容調整行動」を多く使用する傾向を見せている。一方、対面接触場面において、NSによる「実行型形式調整行動」の使用が多く観察されるが、NNSによる使用が多かったのは「実行型内容調整行動」である。しかし、さらにその内訳を調べた結果、接触場面別による使用上の特徴は特にないようである。

今回の調査を通して上記の結果が得られたが、今回調査対象となっている二種類の会話データの会話参加者はそれぞれ異なるため、比較するのに限界があり、大まかな使用傾向を提示することにとどまった。この点について今後改善していきたいと

思う。しかしながら、このような使用実態調査から言えるのは、日本語の会話教育における接触場面の問題は NS と NNS の発話の修正のみならず、両者が共通の理解と情報を共有するために行っていく共同作業として見直すべきだということである。そのためには、接触場面のコミュニケーションにおける NS と NNS のインターアクションの実態について、さらに探究し研究されることが期待されるであろう。

参考文献

- 池田玲子（1999）「ピア・レスポンスが可能にすること：中級学習者の場合」『世界の日本語教育』第9号、p.29-43、国際交流基金日本語国際センター。
- 宇佐美まゆみ（2007）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2)（研究代表者：宇佐美まゆみ）研究成果報告書。
- 宇佐美まゆみ監修（2011）「BTSJによる日本語話し言葉コーパス（2011年版）」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究B（課題番号20320072）研究成果。
- 施信余(2013)「遠隔接触場面の話し合いに見られるコミュニケーション・ストラテジー—調整行動の分析を中心に—」『台湾日本語文学報』33、p.225-248、台湾日本語文学会。
- 施信余(2014)「対面接触場面における調整行動—台湾人日本語学習者と日本語母語話者の会話より—」『日本語/日本語教育研究』5、p.191-206、日本語/日本語教育研究会。
- ネウストプニー,J.V. (1997)「プロセスとしての習得研究」『阪大日本語研究』9、p.1-15、大阪大学文学部。
- ファン,S.K. (1999)「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』Vol.2, No.1、p.37-48、社会言語科学会。
- 宮崎里司（1998）「第二言語習得理論における調整、意味交渉及びインプット」『紀要』11、p.177-190、早稲田大学日本語研究教育センター。
- 宮崎里司（2002）「第二言語習得研究における意味交渉の問題」『早稲田日本語教育研究』創刊号、p.77-89、早稲田大学大学院日本語教育研究科。

- 村上千代（1997）「日本語母語話者の「意味交渉」にタスクの種類が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」『第二言語としての日本語の習得研究』1号、p.119-136、第二言語習得研究会編集、凡人社。
- 尹智鉉（2002）「遠隔接触場面における日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー」『社会言語科学会第10回研究大会予稿集』、p.21-23、社会言語科学会。
- 横山紀子（1998）「言語学習におけるインプットとアウトプットの果たす役割—効果的な「気づき」を生じさせる教室活動を求めて—」『日本語国際センター紀要』第8号、p.67-80、国際交流基金日本語国際センター。

付記

1. 本稿は、台湾 103 年度行政院科技部專題研究計畫 (MOST103-2410-H-032-018-) の研究成果の一部である。
2. 本稿は、2014 年臺大日本語文創新暨創系 20 週年国際学術研討会 (日時：2014 年 11 月 21 日、会場：台湾大学文学院) において口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。

本論文於 2015 年 10 月 15 日到稿，2015 年 12 月 9 日通過審查。